中原中也記念館
館報2025 30

Public relations magazine
第30号

【特別寄稿】
中原中也記念館の30年
佐々木幹郎

【開館30周年記念対談】
30年の歩みをふりかえって
福田百合子×中原豊

【館報第30号記念】
30年間の展示記録

【テーマ展示】
郵便で御免下さい ――中原中也の手紙

【特別企画展】
中也とランボー、ヴェルレーヌ

【企画展】
企画展Ⅰ ダダイスト中也のノート
企画展Ⅱ［前期］浅田弘幸展
――『眠兎』と中也、そして新作絵本
［後期］原田和明のオートマタと中原中也

【記念館ニュース】
開館30周年記念事業 ほか
主なできごと（2024年度行事記録）
第30回中原中也賞
2025年度行事予定

Nakahara Chūya Memorial Museum

中原中也記念館の30年

佐々木 幹郎

わたしが中原中也記念館と長く関わりを持つきっかけになったのは、谷川俊太郎さんの一本の電話からだった。わたしの最初の中原中也論である筑摩書房版『中原中也』が出たのは一九八八年のことだが、その本の資料調査のために湯田温泉の中原家を一九八八年以前に何度か訪れたことはあったが、山口市と関わりを持つことはなかった。その頃、まだ記念館は山口市で創設の機運もなかったのだ。

谷川さんからの電話は、山口市が記念館を一九九四年二月に創設するということが決まった前年（九三年）の暮れのことだった。

山口市の若い人たちが、中原中也に関するイベントを企画していて、その相談に乗ってほしいと言ってきたのだけれど、それなら自分よりも佐々木幹郎のほうが適任だと推薦しておいたから、是非、よろしく。

そんなふうに電話で突然言われた。詳しいことは現地に行って聞いてね、というのだ。ここから、後に「平成ＤＡＤＡ実行委員会」と名付けられることになる山口市の若い人たちのグループと付き合うことになったのだった。

このグループは中原中也記念館と直接のつながりはなかった。しかし、記念館のその後の行事の基礎的なイメージを作り上げたのは、かかってこの市民たちのパワーだったとわたしは思っている。

企画の中心となったのは、当時山口日産の営業部にいた故・永井健一郎氏だった。彼自身は宮沢賢治のファンだったのだが、中原中也記念館が創設されることを知って、是非地元で中也を顕彰し全国に発信できるようなイベントをしたいと考えた。山口と言えば維新の志士たちのことばかりが知られているのを変えたい、それとは違う山口の魅力を全国に伝えるイベントを継続してやりたい、というのだ。わたしはその頃、記念館の創設にあたって山口市からいくつかの相談を受けていたが、それとは違う底のほうから沸き上がってくる熱気を彼を中心とするグループから受け取った。

わたしは山口へ行き、本気でやるのなら、こういうことは可能だろうか？　という案を出した。

中原中也の詩碑がある高田公園（現・井上公園）にテントを建てて、中也の詩「サーカス」を真似て、道化師に空中ブランコをさせる。その下で音楽と詩の朗読会をやる。最後に空中ブランコを見上げながら、「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」を会場全体で合唱する。

この無謀な、膨大な経費がかかる企画に、即座に、やりましょう！　と言ったのは永井氏だった。テントは一日だけ建てて、翌日には撤去しなければならない。後に彼から聞いたのだが、経費は膨大だが最初から自費を投じるつもりだったという。

山口市からの援助はないままに、また湯田温泉の温泉組合から高田公園を使うことに反対の声もあがったのだったが、それを説得して、企画は実現した。「平成ＤＡＤＡ実行委員会」にはその当時市役所に勤めていた若い人びとも参

加していて、イベントへの寄付を含め、さまざまに具体的な援助してくれた。イベントのゲストの送迎も彼らがしてくれた。そのうちの一人が、現・山口市長の伊藤和貴氏であった。

一九九四年の中原中也の生誕日（四月二九日）に、平成ＤＡＤＡ実行委員会の最初のイベントが行われた。これを「九十－三年祭」と銘打った。その年から三年後の一九九七年が生誕九十周年にあたるので、そこから逆算したのである。谷川さんに企画を伝えると、すぐに乗ってくれた。当日はテントのなかで谷川俊太郎、伊藤比呂美、わたしの詩の朗読があり、音楽集団「たま」が演奏した。

当日まで成功するかどうか、わたしははらはらしていたが、テントの内部からリハーサルの音が聞こえ出すと、子どもたちが群がってテントの裾をめくって中を覗き込んでいる姿があった。夜が更けると、空中ブランコの揺れる姿がテント内部の照明に照らしだされて、大きなシルエットとなり、近隣のビルの壁に映り、「ゆあーん ゆよーん」の合唱の声とともに感動的な光景となった。大成功だった。

翌年から山口市が資金的な援助をしてくれ、会場は維新記念公園野外音楽堂となり、「九十－二年祭」、「九十－一年祭」と続き、一九九七年の生誕九十周年には、四日間にわたって多くのゲストを迎え、高田公園、野外音楽堂、市民会館などでイベントが行われた。それ以降は、中原中也記念館での、現在まで続く「空の下の朗読会」に企画は引き継がれた。

わたしは中原中也記念館が創設された直後、「日本経済新聞」（一九九四年二月一三日）に、次のように書いたことがある。

「中原中也記念館が出来た現在でも、詩人としての中原の仕事が本当に認められたのか、どうか。山口市の地方振興策、観光の目玉商品として中原中也という名が利用され出した、と言ったほうが正確なのかもしれない。しかし、そうであってもかまわない、とわたしは思う。詩人と作品を理解するためには、誤解から始まってもいい。中原の作品は柔軟で強靱な構造を持っていて、どのような酷使にも耐え得る。

ただ、詩人の記念館が観光施設としてだけ終始するのなら、地下の中原中也が泣くだろう。「記念館」と銘打った限りは、中原の詩の本当の魅力がここへ来ると、誰にでも発見できるようになることが肝腎だ。記念館は文学館の役割を、当然求められる。オリジナル資料の保管と収集。そして、中原の詩の世界の深さを、読者の誰もがさらに究めることができるように、これまでとこれからの、中原中也研究の成果がすべて集中するような、データの蓄積と、そのためのシステム作りが必要とされるだろう。記念館の仕事は、開館してからが重要なのだ。」

三十年経っても、右のわたしの意見は変わらない。開館以来現在まで、中原中也記念館は資料の保管と収集、データの蓄積とデータの新しい公開方法など、さまざまな努力をしてきた。ことに詩の言葉と音楽と朗読の関係については、抜きんでた資料の蓄積がある。

もし未来の中原中也記念館のイメージを言うとするなら、「詩魂の安住の場所」（吉本隆明「中原中也について」、『新編中原中也全集』別巻「月報」）を指し示し続けた最後の詩人の勇気を、誰にでも提示できる記念館であることを願う。

佐々木 幹郎　（ささき・みきろう）

詩人。ミシガン州立オークランド大学客員研究員、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文芸非常勤講師を歴任。詩集に『蜂蜜採り』（書肆山田、高見順賞）、『明日』（思潮社、萩原朔太郎賞）、『鏡の上を走りながら』（思潮社、大岡信賞）など。評論集に『中原中也』（筑摩書房、サントリー学芸賞）、『アジア海道紀行』（みすず書房、読売文学賞）、『中原中也―沈黙の音楽』（岩波新書）など。『新編中原中也全集』全６巻（角川書店）責任編集委員。

開館30周年記念対談

30年の歩みをふりかえって

福田百合子（名誉館長）×中原豊（館長）

福田百合子名誉館長は、開館時の1994年に館長に就任し、中原豊館長は2003年に副館長として着任後、2009年に館長に就任しました。このたび開館30周年を迎え、歴代館長のおふたりが、開館以来の思い出を語り合いました。

■開館当初の苦労

中原館長（以下、中原） 先生は、今の山口県立大学で国文学を教えておられましたね。雑誌の「文芸山口」にも「中原中也詩私解」を連載されていたし、「防長新聞」の中也の短歌なども紹介されていました。そこで中原中也記念館の館長に、というお声がかかったという感じでしょうか。

福田名誉館長（以下、福田） それもあるかもしれませんね。「婦人画報」に初めて載った中也の短歌を、国会図書館に調べに行きました。「婦人画報」に作品が掲載されているということは分かっていたのですけど、雑誌のバックナンバーを見て、中也の「筆とりて」という短歌を実物で確認したというのは、私が初めてだったと思いますね。そういう意味で、たくさんの民間の人とか、それから私の先生とかに、助けられての中也記念館への勤務だったと思います。

近代文学がご専門の中原先生に来ていただいたというのは、やはりとても良かったですね。

中原 ありがとうございます。先生は、古典の方がご専攻でしたから……。

福田 開館当初は私、まだ県立大にいたのですよね、2月がオープンでしょ。だから1月1日から辞令をもらったのです。3月までは県立大にも記念館にも籍があって、両方を行ったり来たりしたような気がしています。全てのことは、ふくふくコンビと言われた、福田祥介（しょうすけ）さんが副館長として仕切ってくださっていたのですね。だから私は、辞令を早くにもらったのに、来たのはオープニングの時というような感じでした。

そして先生は、中原中也の会などでしょっちゅう出入りはしておられましたよね。

30年の年表

1992 3月 山口市が中原中也生家跡地に記念館を建設することを決定
9月 記念館の基本設計を決めるコンペで、応募総数479件から最優秀に宮崎浩氏（プランツアソシエイツ）が決定
1993 10月 記念館の建物が完成
12月 市民グループ「平成DADA実行委員会」が発足
1994 1月 福田百合子が館長に就任
2月 開館
4月 中原中也生誕祭90－3年祭開催（主催・平成DADA実行委員会／以後、生誕90年までの生誕祭を同会が主催）
1996 3月 「中原中也記念館館報」創刊号を発行
3月 機関誌「中原中也研究」創刊号を発行
4月 財団法人山口市文化振興財団が発足し、記念館は山口市の直営から財団の運営に移行する（現在は公益財団法人）
9月 中原中也の会発足、創立記念大会を開催
1997 2月 県道側に前庭を拡張、分館完成
1998 4月 中原中也生誕91年祭開催（以後、毎年4月29日の生誕日に中原中也生誕祭「空の下の朗読会」を開催）
11月 地域社会に貢献し地域に根差した優れた公共建築として「公共建築百選」に選定される
1999 5月 開館時間1時間延長を開始（以後、毎年5～10月に実施）
2003 3月 新収蔵庫完成
2004 2月 開館10周年
リニューアルオープン、現在の常設展示・テーマ展示・企画展・特別企画展の展示スタイルとなる
4月 中原家から中原中也直筆原稿受贈、資料を一般公開（ホテルニュータナカ）

中原　そうですね。開館当初は長崎大学の教員をしていて、中原中也の会の事務局をやっていましたから。

卒業した山口大学の学会が春ぐらいにあって山口に来る機会がありましたので、その時に記念館にも立ち寄って事務局の仕事をしていました。

福田　よく来られたのを思い出しますね。本当を言えば、先生がまだ学生の頃に私、山大に伺っていましたから、先生の学生の頃を存じ上げていますのよ。

中原　多分、最初にお会いしたのは、まだ二十歳になっていない学生の頃です。

福田　学会の受付を一緒にさせてもらったこともありますね。

中原　はい、そうでした。当時は中原中也記念館ができるというような雰囲気もあまりなかったですね。

福田　そうなのですよ。ただ、日産に勤めておられた永井健一郎さんという方が非常にご熱心で……。

中原　「平成ＤＡＤＡ実行委員会」をのちに立ち上げる方ですね。結構、地元の若い方が中心となって、関心を持っておられたということでしたね。

福田　そうでしたね。

中原　開館当時は、まだ中原家の拾郎（じゅうろう）さん（中也の弟・伊藤拾郎氏）がお元気でしたから、こちらにお見えになっていた。

福田　そうですね。拾郎さんと美枝子さん（中也の弟・思郎（しろう）氏夫人）からいろいろお電話もありましたし、いらっしゃることもありましたからね。拾郎さんはハーモニカ奏者ですから、ハーモニカの演奏会があったり、いろいろな方がゲストで見えてくださったりして。

中原　最初の頃は、入館者もとても多かったですよね。

福田　はい、多かったです。文学館はまだ珍しかったのでしょうね。

中原　実は、オープンの日に私も来ていたんですよ。

福田　そうですか！　それは失礼しました（笑）。

中原　一般の入館者として来ていたのですが、すごく人が多くてびっくりしました。その当時から展示も大きく変わりましたね。最初の展示が、あまり評判がよろしくなくて。

福田　よろしくなかったのです。展示業者に丸投げみたいな形でしたから。中也の詩の全文をきちんと展示しているところがどこにもないって、中村稔先生（詩人・弁護士）から言われて、文学者としてはいろいろ意見がおありでしたね。

中原　佐藤泰正先生（梅光学院大学教授）が来られて、いろいろアドバイスをしてくださったそうですね。

福田　それはとてもありがたかったです。10周年記念の前の年でしたでしょうか、中原先生が着任されてから、大幅に内装と展示構成をリニューアルしましたね。

中原　副館長時代は学芸担当副館長という役職で、学芸の仕事をどちらかといえばやっていました。10周年に向け

2007　6月　「中原中也を読む会」（中也の詩を中心とした読書会）スタート
2007　4月　中原中也生誕１００年「中原中也生誕百年記念事業」を実施（～翌年３月／共催：中原中也生誕百年記念事業実行委員会）
2008　12月　中原中也の会日仏合同企画「中原中也――日仏近代詩の交感」フランス・パリやシャルルヴィル＝メジエール（ランボー生誕地）を巡り、シンポジウムやランボー記念館との交歓セレモニーなどの交流事業を開催
2009　4月　館長に中原豊、名誉館長に福田百合子が就任
2014　2月　開館20周年リニューアルオープン、「開館20周年記念事業」を実施（～翌年２月）
2015　2月　公式ガイドブック『中原中也の世界』刊行
2015　4月　オリジナル詩集『中也の詩』（非売品）の作成・湯田温泉宿泊施設への設置開始、９月から販売開始
2015　3月　中学生向け副読本『出会い？発見!?感動!! 中也読本』刊行、４月から市内の全中学校生徒・教員に無償配布（以後、３年間）
2016　4月　18歳以下の入館料無料化を開始
2016　3月　新たな資料データベース・システムを導入
2017　4月　山口市内小中学生を対象とした詩のコンクール、「ぼうしの詩人賞～あつまれ！未来の中也たち！～」創設
2017　4月　「中原中也生誕１１０年記念事業」を実施（～翌年３月）
2018　4月　ミュージアム・ガイドアプリ「ポケット学芸員」を導入
2019　2月　「開館25周年記念事業」を実施（～翌年２月）
2022　3月　公益社団法人日本建築家協会「ＪＩＡ25年賞」を受賞
2023　3月　国文学研究資料館の事業に協力し、中原中也自筆資料画像を国文研データベースおよび記念館公式ウェブサイトで公開開始
開館30周年
2024　2月　「開館30周年記念事業」を実施（～翌年２月）

て開かれた展示検討委員会には、私は出ていないのですよ。そこで練り上げられた方針を、実行に移すところで来たのです。だからある意味、理想を現実にしなければいけなかったので、そこは大変なところがありましたね。企画展を中心にして、展示替えを頻繁にしてリピーターを増やすという方針があって、それはもっともだと思うのですけど、最初は展示が年に6回あったかな。展示替えをしたらすぐ次に取り掛かるということで、私の他に学芸員がひとりしかいなかったので、とても忙しかったです。開館当初は収蔵資料があまりなく、中也の直筆資料もほとんど中原家の方で持っておられたところから、10周年に向けて、どんどん改善をしていきました。新しい収蔵庫もできて、ようやく中原家から資料をご寄贈いただくことができました。

福田　ホテルニュータナカで全資料展示をしましたね。

中原　全部がオリジナルの資料なので、今ではなかなかできない展示ですね。多分、1日だけの展示だったと思います。

開館当初の展示室

開館記念式典（1994）

■さまざまな出会い

中原　開館後の一番苦労の多い時期を先生がリードして来られて……。短歌のこともそうですけど、いろいろ大切な発見やお仕事をして支えてきてくださいました。

福田　高森文夫が唯一持っていた『山羊の歌』とか、その場で貰ってきたこともありました。高森と同じ宮崎の東郷町に住んでいた同級生がいて、その彼女が呼んでくれたのです。そのようなご縁もあって良かったと思っています。中也がはるばる東郷町へ訪ねて行った時のお話とかを聞いたりして。本当に好々爺（こうこうや）になっておられた。一番の思い出ですね。

中原　当時は記念館ができたおかげで、いろいろな方が資料を持ってきてくださったと思うのですけど、小林秀雄宛献呈署名入りの『山羊の歌』もご寄贈いただきました。

福田　そのようにご寄贈くださった方がいてありがたかったです。

中原　その頃、大事な資料としては、安原喜秀さん（安原喜弘氏ご子息）がお持ちの中也の手紙がありましたね。当時は寄託という形でこちらに預けていただいていました（現在は安原喜弘文庫として記念館で収蔵）。いろいろな方が来られて、先生が向き合われて、またそれが資料の寄贈や寄託につながっていったのだと思うのですが、他に印象に残っている方はいらっしゃいますか。

福田　長谷川泰子のお孫さんの中垣芽美（めみ）さんね。中也記念館に何回も来られたりして、親しく付き合いました。私が持っていた象さんの置物をあげたら、これは本当に嬉しいのですけどね、すぐに革製の眼鏡入れとペンケースを送ってくださったのよ。

中原　それから、神戸の震災の時のエピソードもありました。

福田　震災後、中也の原稿を持っていた方のところに、福田祥介さんと一緒にお見舞いに行きました。その後、「形あるものは、必ず滅びる。だけれども、あるべきところにあれば、みんなに見てもらえる。」というお手紙が来て、「六月の雨」の原稿を送ってくださったのですね。

中原　そういういろいろなご縁で、先生のところに集まってきた形でしたよね。私の代になってから寄贈される方は、中也と直接会った世代から次の世代になってきています。そうした方々のおかげで新しい資料が発見されたりもしています。

開館10周年リニューアル後

■印象的なできごと

福田　今の天皇陛下、当時の皇太子殿下がお見えになりましたね。いらっしゃる前に、当時の山口県知事から電話がかかってきて「皇太子殿下は「子守唄よ」という詩を美智子様からよくお聞きになったそうだ。あなた、それ知っちょるかね。」と。それで大急ぎで読んだりして……。子守唄が海を越えて消えていくだろうか、という悲しい詩だと思ったのです。皇太子様にお会いしても、こちらから絶対に話しかけてはいけないと言われる。でも「あのですね、皇太子様、私は、子守唄のなんとかかんとか……。」と一生懸命に喋っちゃった。

中原　先生はその時お怪我をしていて、車椅子に乗っておられて。

福田　中也の日記を出して、それを覗き込まれた時、「車椅子から立ち上がってもよろしいでしょうか。」とお尋ねしたら、殿下が手をさしのべてくださったのです。

中原　あれは、本当に先生ならではのエピソードですね。

福田　中原先生はいかがですか？

中原　２００７年の中也の生誕100年ですね。あの時はいろんなイベントをやりました。

福田　そうですね。サーカスまで来て、空中ブランコとか。

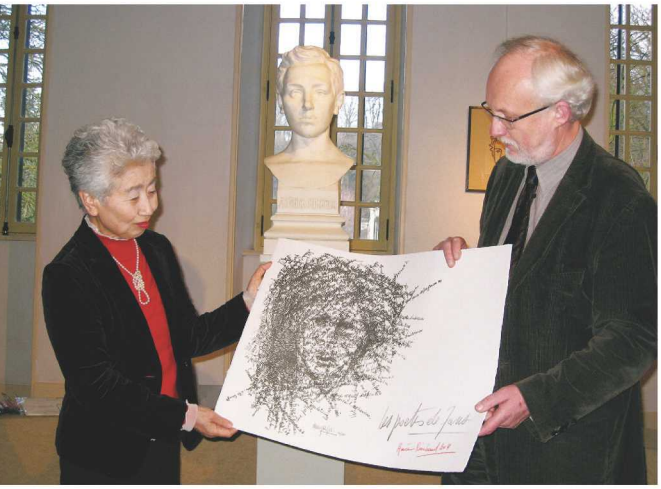
中原　「生誕百年記念事業実行委員会」ができて、こういうことは記念館だけではできなかったですね。とにかく大変でしたが、でも、楽しかったですね。あとは、やはり先生、フランス行き（日仏合同企画「中原中也――日仏近代詩の交感」）ではないですか？

福田　ああ、フランス行き！

中原　この時は、先生もそうですけど、北川透さん（詩人）とか、佐々木幹郎さん（詩人）、福島泰樹さん（歌人）とか、皆さんお元気で。

福田　もう出発前からビール飲んで、まだまだ元気でしたね、ちょっと若いから。シャルルヴィル＝メジエールのランボー記念館にも、パリからバスで。

中原　２時間くらいかかりましたね。中原中也の会の企画のおかげで実現した形でしたけど。今年度の特別企画展「中也とランボー、ヴェルレーヌ」にもつながりました。この時もそうですが、中原中也の会をはじめとして、いろいろ他の動きと連携しながら、記念館の運営をやってこられたのが良かったのかなという気がします。いろんな力が結集して、まあ、究極的には中也のおかげなのですけど……。



ランボー記念館訪問（2008）

福田　そうです。

中原　中也で何かやろうと言うと、賛同してくださる方が多いので。

福田　皆さんがそうやって集まったり、手助けをしてくださったりするから、嬉しいですよね、やっぱり。

■これからの記念館

福田　中也も若かったわけですから、若い世代の方にもっと知ってほしいですね、昔の人として中也を見るというのではなくて、同世代的な共鳴みたいなもの、あるいは反発でもいいのですけど、そういうものをもっと聞きたいし、交わっていきたいと思いますね。「中原中也を読む会」などは、少し若い方が来られるから嬉しいですね。

中原　そうですね。今はどちらかというとコミックやアニメのおかげで、中也に関心がある若い世代がどんどん増えてきて、その世代を文学の世界に誘（いざな）うというのは、大きな役割かなと思います。

それから、充実してきた資料をどう活用するか。これまでも資料データベースの公開などに取り組んできましたが、時代に合わせて活動を拡大していきたいですね。

（２０２４年12月６日、中原中也記念館分館にて）

1994－2024

30年間の展示記録

開館以来、展示を通じて、中原中也の世界をさまざまな切り口やテーマで紹介してきました。その道のりを振り返ります。
（1994 ～ 2003 年は年間の主な展示のみ記載）

1994（平成 6 年）
特別展示
中也の軌跡

1995（平成 7 年）
企画展
中也の軌跡Ⅱ　上京・「朝の歌」のころ

1996（平成 8 年）
企画展
中也の軌跡Ⅲ ―「寒い夜の自我像」とその周辺―

1997（平成 9 年）
特別企画展
中原中也とランボー ―無疵な魂（もの）なぞ何処にあらう？―

1998（平成 10 年）
企画展
中也の軌跡Ⅳ ―『山羊の歌』が世に出るまで―

1999（平成 11 年）
特別企画展
中原中也と前川佐美雄
企画展
中也の軌跡Ⅴ ――『在りし日の歌』のなかの子供

2000（平成 12 年）
特別展
中原中也と安原喜弘
～一番頼りにしていた友人への手紙展
企画展
中也の軌跡Ⅵ　短歌～詩世界への出発点

2001（平成 13 年）
特別展
書簡にみる交流の足跡
企画展
秋の悲歎・富永太郎――私は私自身を救助しよう。

2002（平成 14 年）
特別企画展
二つの中也の首――彫刻家・高田博厚の極限のフォルム
企画展
丘の上サあがつて――中村古峡と中原中也

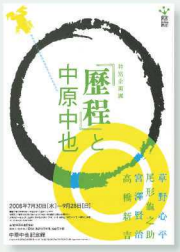
2003（平成 15 年）
秋の企画展
青いソフトに――北原白秋と中原中也

2004（平成 16 年）
常設テーマ展示
中也　愛の詩――長谷川泰子をめぐって
特別企画展
宮沢賢治と中原中也
企画展　「中也の書」「第 9 回中原中也賞」「続・中也の書」「文学サロンとしての酒場」「河上徹太郎」

2005（平成 17 年）
常設テーマ展示
祈り――中也の宗教性
特別企画展
中原中也と西洋音楽
企画展　「第 10 回中原中也賞」「中原中也―花と言葉の詩画集―　若林佳子押し花アート原画展」「中也と流行歌」

2006（平成 18 年）
常設テーマ展示
詩人をはぐくんだ風土・山口
特別企画展
青山二郎と中原中也
企画展　「嘉村礒多」「第 11 回中原中也賞」「中原中也・詩の情景／絵画の情景　あ、？――山根秀信展」「日本のダダ」

2007（平成 19 年）
常設テーマ展示
中原中也とフランス文学
特別企画展
小林秀雄と中原中也
企画展　「第 12 回中原中也賞」「収蔵資料展」「私の好きな中也の詩」「中也の住んだ町　京都」



2008（平成 20 年）
常設テーマ展示
友情――君と僕との命はかゞり
特別企画展
「歴程」と中原中也
企画展　「第 13 回中原中也賞」「美と痛み――大和保男の陶と中原中也」「中也の兄弟たち」

2009（平成 21 年）
常設テーマ展示
哀悼の詩――愛するものが死んだ時には
特別企画展
月光とメルヘン
企画展　「第 14 回中原中也賞」「湯田温泉物語」「収蔵資料展」

2010（平成 22 年）
常設テーマ展示
『山羊の歌』まで
特別企画展
河上徹太郎と中原中也――その詩と真実
企画展　「第 15 回中原中也賞」「中也の住んだ町――中野・高円寺」「中也が読んだ本」

2018（平成 30 年）

テーマ展示
中原中也の散歩生活
特別企画展
大岡昇平と中原中也
企画展　「中也、この一篇――「帰郷」」
「文士の肖像――林忠彦写真展」

2019（平成 31 年・令和元年）

テーマ展示
四季詩集――中也とめぐる春夏秋冬
特別企画展
富永太郎と中原中也
企画展　「沸騰する精神――詩人・上田敏雄」「ムットーニからくり文学館」「清家雪子展――『月に吠えらんねえ』の世界」

2020（令和 2 年）

テーマ展示
教科書で読んだ中也の詩
――思い出の一篇
企画展　「〈汽車が速いのはよろしい〉――中也の詩と乗り物」「中也の住んだ町――鎌倉」

2021（令和 3 年）

テーマ展示
君に会ひたい。――中原中也の友情
特別企画展
書物の在る処――中也詩集とブックデザイン
企画展　「中也、この一篇――「正午」」「雑誌「詩園」――中也・山頭火と山口の文学青年たち」

2022（令和 4 年）

テーマ展示
中也の本棚――日本文学篇
特別企画展
坂口安吾と中原中也――風と空と
企画展　「中也の住んだ町――幼少期」
「中也、この一篇――「一つのメルヘン」」

2023（令和 5 年）

テーマ展示
詩集『山羊の歌』
特別企画展
草野心平と中原中也
企画展　「中原中也と関東大震災」「中也と短歌」

2024（令和 6 年）

テーマ展示
空の歌
特別企画展
中也とランボー、ヴェルレーヌ
企画展　「ダダイスト中也のノート」「浅田弘幸展――『眠兎』と中也、そして新作絵本」「原田和明のオートマタと中原中也」

2011（平成 23 年）

常設テーマ展示
これが私の故里だ
特別企画展
雑誌「四季」と中原中也
企画展　「宮嶋康彦――中原中也に訣別　白と黒の振幅の果てに」「中也の母・フク」

2012（平成 24 年）

常設テーマ展示
『在りし日の歌』まで
特別企画展
中原中也の手紙――安原喜弘との交友
企画展　「高橋新吉――ダダイズムと関東大震災」「中也の父・謙助」

2013（平成 25 年）

常設テーマ展示
中也の“うた”
特別企画展
「文学界」と中原中也
――1930 代の文芸復興
企画展　「旅する中也――汽車の笛聞こえもくれば」

2014（平成 26 年）

テーマ展示
中也　愛の詩――いとしい者へ
特別企画展
中原中也と日本の詩
企画展　「中原中也記念館の 20 年」「中原中也　歩みのリズム――〈僕は街なぞ歩いてゐました〉」「下瀬信雄写真展　「さやかに風も」」

2015（平成 27 年）

テーマ展示
中也　祈りの詩
特別企画展
萩原朔太郎と中原中也
企画展　「中原中也賞の 20 年」
「中也の住んだ町――新宿」

2016（平成 28 年）

テーマ展示
中也の本棚――外国文学篇
特別企画展
太宰治と中原中也
企画展　「DADA　1919 → 1923　ツァラそして中也」
「中也、この一篇――「サーカス」」

2017（平成 29 年）

テーマ展示
私が選ぶ中也の詩
特別企画展
詩が生まれた場所へ――中也の見た風景
企画展　「山頭火と湯田温泉」「コミックのなかの中也」
「山口盆地考 2018..... 吹き来る風が .....」

第22回テーマ展示

郵便で御免下さい
――中原中也の手紙

中原中也は筆まめで、常に切手や便箋を持ち歩き、友人や家族に向けてたくさんの手紙を書き送っています。そこには、詩人としての感性が光るものや文学への情熱が生き生きと表されているものもあれば、旅先から出した絵はがきや帰省した山口での日々をのんびり書き綴ったものもありました。中也にとって手紙とは、直接自分と相手とをつなぐ、自己表現の一つでもありました。

本展では、手紙を通して見えてくる中也の意外な一面と、「手紙」がもつ面白さに迫りました。

2025 2.14(金) ～ 2026 2.15(日)

展示1 「詩人」からの手紙

中也の手紙の中には、自己の喜怒哀楽や相手への思いが詩情豊かな言葉とともにしたためられているものが多くあります。そこには、自分のことを分かってほしい、語りたいという中也の切なる思いが深く感じられます。

展示1では、詩人ならではの中也の感性があふれる手紙を中心に紹介しました。

展示2 日々のあれこれ

中也の手紙の中には、家族への連絡や旅先からの絵はがき、故郷・山口での日々を綴ったものなど、何気ない日々の生活が垣間見えるものがあります。

展示2では、日常的な内容の手紙を紹介し、ひとりの人間としての中也の素顔を紹介しました。

展示3 詩人としての活動

中也の手紙には、詩の創作を行う以外にも、フランス詩の翻訳や自身の詩集刊行などに奔走している様子が書かれています。また、哲学に言及しながら自分の考えを語っていたり、詩が出来る前の心の状態について述べているものなどもあります。

展示3では、文学や哲学などに言及している書簡を通して、中也の詩人としての活動の多様な側面を浮かび上がらせました。また、中也の友人で批評家の河上徹太郎が発表した評論「中原中也の手紙」を通して、手紙から見えてくる詩人・中原中也について考察しました。

固定ケース「詩稿在中」――手紙で送った詩・論文・翻訳

中也は、依頼原稿とは別に、自分の詩や論文を友人に書き送っていました。それは、通常の手紙文では書き表すことができない、己の複雑な感情や相手への謝意などを込めた自己表現であり、自分の作品を理解してくれる友への期待や信頼の表れでもありました。

ここでは、中也が手紙で送った詩や論文などを紹介しました。

展示4 友人たちから見た「中原中也の手紙」

中也の死後も、その手紙は友人たちのこころをとらえて離しませんでした。安原喜弘は中也からの100通以上の手紙を大切に保管し、その手紙を元に『中原中也の手紙』を出版します。

一方、大岡昇平は、中也が亡くなった約40年後に発見された竹田鎌二郎宛書簡に自分の悪口が書かれていたことに怒り、高森文夫は肌身離さず持っていた80通以上の手紙をシベリア抑留の際に没収され、深い悲しみに包まれます。

展示4では、中也の手紙に対する友人たちの思いに焦点を当てました。

特別コーナー 中原中也の手紙を手に取って読んでみよう！

本展で紹介している中原中也の書簡のなかから3点を選び、手紙（複製・原寸大）を実際に手に取って読めるコーナーを設置しました。

《主な展示資料》
中原中也書簡（正岡忠三郎宛、安原喜弘宛、小出直三郎宛、竹田鎌二郎宛、中原フク宛、高森文夫宛）、中原中也「ノート小年時」、中原中也原稿「冬の夜」「羊の歌」「薔薇」「河上に呈する詩論」、安原喜弘『中原中也の手紙』、中原家で使用していた机

特別企画展

中也とランボー、ヴェルレーヌ

2024.8.1（木）-9.23（月・祝）

中原中也に大きな影響を与えたフランス象徴派の詩人、アルチュール・ランボーとポール・ヴェルレーヌ。中也は17歳のときに彼らの詩に出会い、魅了され続けました。その憧れは中也が詩人として成長していくうえで大きな糧となりました。

ランボーとヴェルレーヌの影響が中也の作品にどのように息づいているのか、また、日本のランボー受容史において輝きを放つ中也の翻訳の魅力に迫ることで、現代においても読み継がれ、多くの人々を惹きつける3人の詩の世界を紹介しました。

協力　ランボー記念館　Musée Arthur Rimbaud（フランス シャルルヴィル＝メジエール市）

展示1　ランボー、ヴェルレーヌへの扉——富永太郎を通じて

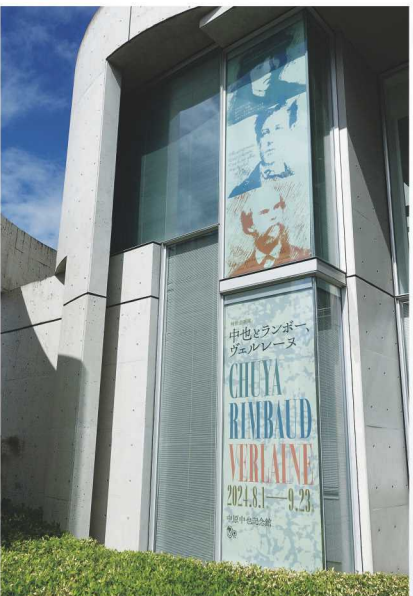
1924（大正13）年、中也は京都で出会った詩人・富永太郎を通じてフランス象徴派詩人の存在を知ります。富永が持つフランス詩の知見を貪欲に吸収しながら、中也は自らの詩の感性を磨いていきました。

展示1では、中也とランボー、ヴェルレーヌの詩との出会いの時期を、主に富永が遺したフランス詩関連資料から読み解きました。

展示2　ヴェルレーヌとランボー

ヴェルレーヌは韻を駆使した音楽性豊かな詩風を特徴とし、生涯に540篇もの詩を残しました。ランボーは16歳でヴェルレーヌに早熟な天才的詩才を見出されますが、ヴェルレーヌとの破滅的な関係が破綻したのち、20歳頃に詩作を放棄します。残された作品は散文詩集『地獄の季節』『イリュミナシオン』のほか韻文詩約60篇のみですが、鮮烈なイメージに満ち、自由詩の先駆けともいわれるランボーの手法は世界の近代文学に大きな影響を与えました。

展示2では、ふたりの人生と詩業を紹介しました。また、ランボーの故郷であるフランス北部の町、シャルルヴィル＝メジエールのランボー記念館館長から本展のためにいただいたメッセージを紹介するとともに、中原中也記念館、中原中也の会との交流を紹介するコーナーを設けました。



特別コーナー①
詩集でたどるヴェルレーヌ、ランボーの受容史

明治20年代以降、上田敏、永井荷風、蒲原有明、堀口大学といった詩人たちがヴェルレーヌやランボーをはじめとするフランス象徴派の詩人たちを文学雑誌などで取り上げ、翻訳詩集を刊行します。彼らが紹介した新しい詩の世界は同時代の詩人たちに大きな影響を与え、日本の近代詩はさらに発展していきました。

このコーナーでは、ヴェルレーヌ、ランボーの主な翻訳詩集を通じ、その受容の歴史をたどりました。

展示3
翻訳への取り組み

中也は生涯に3冊の翻訳詩集『ランボオ詩集《学校時代の詩》』『ランボオ詩抄』『ランボオ詩集』を刊行しました。時にくだけた俗語を交えた口語での翻訳は、大正期に広く読まれていた上田敏や永井荷風らの文語調の翻訳と一線を画し、『地獄の季節』などの翻訳で知られる小林秀雄とともに、日本のランボー受容史におけるひとつの転換期を担ったといえます。

展示3では中也のランボーに関する訳業のほか、数少ないヴェルレーヌの詩の翻訳について紹介しました。

展示4
中也の詩に息づくヴェルレーヌとランボー

中也の詩にはヴェルレーヌの影響が多く指摘されています。詩において音楽性を追い求めたヴェルレーヌと、「うた」の要素を重視した中也には詩人としての資質の親和性が感じられます。また、ランボーに関しては、ダダイスムやシュルレアリスムなどにも影響を与えた前衛性が中也を強く惹きつけ、自らの目指す詩人像として憧れの存在となりました。

展示4では、ヴェルレーヌ、ランボーの影響がうかがえる中也の作品を紹介しました。

○紹介した詩　「夜更の雨」「帰郷」「言葉なき歌」「少年時」「湖上」

特別コーナー②
ゾエ・シェレンバウム「Poème à 3 cœurs／三心詩」

フランス人アーティストによる映像作品。中也、ランボー、ヴェルレーヌが茶室に集い、彼らの詩が溶け合う新しい作品を生み出すゲームに興じます。現代アートを通じて3人の詩の世界を捉え直した作品です。

《主な展示資料》
中原中也 翻訳原稿 ランボー「感動」「わが放浪」／ヴェルレーヌ「木馬」、中原中也「ノート1924」「ノート翻訳詩」「翻訳詩ファイル」、中原中也訳『ランボオ詩集《学校時代の詩》』『ランボオ詩抄』『ランボオ詩集』、富永太郎作・中原中也筆「ランボオへ」、富永太郎「フランス詩ノート1」「フランス詩ノート2」、Arthur Rimbaud: *Une saison en enfer*、ベリション版『ランボー著作集』、メッサン版『ヴェルレーヌ全集』全5巻、上田敏訳『海潮音』、堀口大学訳『月下の一群』、川路柳虹訳『ヴェルレーヌ詩集』、小林秀雄訳『地獄の季節』

会期中には、倉方健作氏（九州大学教授）を講師に迎えた「フランス詩の教室―ランボー、ヴェルレーヌの詩をフランス語で読もう！―」や、湯田温泉のレストラン、ル ゴロワを会場とした「展示見学＋フレンチのお食事会―食文化を通じてランボー、ヴェルレーヌの世界に触れる―」などのイベントを開催。楽しみながらフランスの文学、文化に触れる機会となりました。

企画展Ⅰ

ダダイスト中也のノート

2024 4.17(水)~7.28(日)

中原中也は、文学に熱中し、学校の勉強を疎かにしたため、中学3年生の時、山口中学校を落第、京都の立命館中学へ編入。一人暮らしを始めます。

京都で中也が出会ったのが、高橋新吉の詩集『ダダイスト新吉の詩』です。従来の文学表現と一線を画す高橋のダダ詩に魅了された中也は、「ダダイスト中也」を名乗り、新吉の影響が強く感じられる詩を、ノートに綴るようになります。

当時のノートのうちの一冊である「ノート1924」が、使用開始から100年を迎えたのを記念し、本展では、ダダイスムについて、中也との関連を中心に紹介しました。

展示1　ダダイスムとは？

ダダイスムは、1916年に、スイスで始まった芸術運動「DADA(ダダ)」から生じた主義のことです。ダダイスムを実践する人をダダイストといいます。ダダイスムには、理性的存在とされる「人間」と、彼らが生み出した近代文明への強い疑いが含まれています。

ここでは、ダダイスムの概要、ダダと第一次世界大戦との関連について紹介しました。

展示2　高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』

新聞「万朝報」1920（大正9）年8月15日附に掲載された2編の記事が、日本で最初にダダイスムを紹介した文章といわれています。この記事に衝撃を受け、ダダイストになったのが、当時19歳の詩人・高橋新吉です。1923（大正12）年に刊行された高橋の第二詩集『ダダイスト新吉の詩』は、時代を画する詩集となりました。

ここでは、日本のダダを代表する詩集『ダダイスト新吉の詩』と、その著者である高橋新吉について紹介しました。

展示3　ダダイスト中也ダ！

1923年の秋頃、当時16歳の中也は、古本屋で高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』を読み感激、ダダに没頭します。「ダダイスト中也」を名乗り、詩を記したノートを周囲の人々に見せるようになります。

ここでは、『ダダイスト新吉の詩』と出会い、ダダ詩を書き始めた頃の中也について紹介しました。

展示4　「ノート1924」

『ダダイスト新吉の詩』に触発されて、ダダ詩を書き始めた頃に使用していた詩作ノート「ノート1924」には、のちに中也の詩集『山羊の歌』に「春の日の夕暮」という題で収録されることになる「春の夕暮」をはじめ、44篇のダダ詩が書かれています。

ここでは、「ノート1924」について、書かれているダダ詩の紹介と、その後最後の頁から遡って再利用された際に書かれた詩の紹介をしました。

展示5　中也のダダ、その後

「ノート1924」の詩篇に見られたダダの熱狂から醒めた後も、中也の作品の底流には、言葉の常識的な意味に揺さぶりをかけ、読者を翻弄するダダイスムの精神が感じられます。そしてダダは、間欠泉のように、時に作品のかたちをとってあらわれます。

ここでは、高橋新吉の小説から語を採った「(南無　ダダ)」と、「Etude Dadaistique」(ダダ的習作)という副題を持つ「道化の臨終」の2篇を紹介し、中也におけるダダの展開の一端を紹介しました。

《主な展示資料》
中原中也創作ノート「ノート1924」「早大ノート」、中原中也原稿「秋の愁嘆」「処女詩集序」高橋新吉原稿「茶色い戦争」「吉田鉄治原稿「京都断章」「高橋新吉「倭人辻潤」、高橋新吉 著／辻潤 編『ダダイスト新吉の詩』、高橋新吉『ダダ』『雨雲』、「シムーン」第1号

企画展Ⅱ

コラボレーション企画（前期）

浅田弘幸展

――『眠兎（ミント）』と中也、そして新作絵本

2024 9.26 Thu ≪ 2025 1.26 Sun

『ミミ―アイル―』『テガミバチ』（集英社）などの作品で知られる漫画家の浅田弘幸は、初期の代表作『眠兎（ミント）』（集英社）を始め、中原中也の作品や人生に啓発された作品を数多く制作してきました。本展では、中也の詩をテーマにした絵本の出版を記念し、Ⅰ期【～11月24日】は『眠兎』など中也に関連した作品と、浅田の代表作の一つ『ミミ―アイル―』の原稿を中心に、Ⅱ期【11月27日～】は刊行予定の新作絵本の原画を中心に、浅田の画業を紹介しました。

【Ⅰ期】

中也の詩との関わりが特に深い作品『眠兎（ミント）』の原画を、章題となり、単行本では本文の引用もされている中也の詩とともに展示しました。

【Ⅱ期】

絵本『月夜の浜辺』は中原中也の同名の詩をテーマとした、浅田にとって初の絵本となります。展示では、最新作である制作中の絵本原画をいち早く展示しました。

安原喜弘編著『中原中也の手紙』が、浅田の代表作の一つである『テガミバチ』制作において、発想の種のひとつとなったといいます。『中原中也の手紙』は、中原中也の友人・安原喜弘に宛てた中也からの手紙の翻刻と、その手紙にまつわる思い出をつづった安原の文章を、併せて収録した本ですが、展示では「テガミバチ」の原画とともに、『中原中也の手紙』を展示しました。

《主な展示資料》
『眠兎（ミント）』『蓮華』『ミミ―アイル―』『テガミバチ』『どろろ』などの直筆原稿、複製原画など。

イベント

トーク&サイン会

2024年10月19日
KDDI維新ホール・メインスタジオ

トークでは、中原中也の詩が主要な題材となっている浅田さんの作品『眠兎』の名場面をスクリーンに映し出し、さらには作品で引用されている中也の詩の一節を紹介しながら、浅田さんに、『眠兎』と中也の詩の関わり、中也への思いなどについてお話しいただきました。トーク終了後はサイン会が行われました。

企画展Ⅱ

コラボレーション企画（後期）

原田和明のオートマタと中原中也

2025年1月29日（水）▼4月13日（日）

山口市在住のオートマタ（自動機械）作家・原田和明は、これまでも、酒瓶を持った中也がコミカルな動きを見せる「或る中也」や、中也の詩情を月まで届けるゲーム「ゆあーん ゆよーん 月旅行」など、中也の人物像や詩から発想した作品を制作してきました。本展では、中也の詩を題材とした新作10点を含む12点を展示しました。

ピチベの哲学

あのお月様の中のお姫様のやうに
なんにも考へずに絶えずもう踊つてゐれあ
それがハタから見れあ美しいのさ。

「ピチベの哲学」より

月夜の浜辺

月夜の晩に、拾つたボタンは
指先に沁(し)み、心に沁みた。

「月夜の浜辺」より

正午

ぞろぞろぞろぞろ出てくるわ、出て
くるわ出てくるわ

「正午」より

生ひ立ちの歌

私の上に降る雪は
真綿のやうでありました

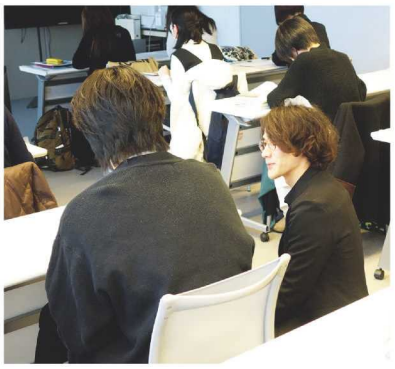
「生ひ立ちの歌」より

《主な展示資料》
原田和明オートマタ作品「或る中也」「ゆあーん ゆよーん 月旅行」「山羊の歌」「ピチベの哲学」「正午」「四行詩」「幻影」「月夜の浜辺」「雲雀」「六月の雨」「或る男の肖像」「生ひ立ちの歌」

記念館ニュース

木下龍也氏創作ワークショップ
「1首つくり終わるまで出られない短歌教室」

2024年3月9日、山口県出身の歌人・木下龍也氏をお招きして、中也の文学的出発点であった短歌の創作ワークショップを開催しました。まずはじめに木下氏流短歌のつくり方を伝授、どんな風に言葉を磨くのか、自身の作品を例に教えていただきました。そのあと参加者は「ずっと胸に残っている風景や感情」をテーマに創作にかかり、たった31音の中にいかに自分の感覚とずれのない世界を端的に表現できるか、試行錯誤を繰り返していました。その真摯なまなざしに、若手の木下氏を中心に短歌界に起きている熱いムーブメントを感じさせるイベントとなりました。



ジェフリー・アングルス氏講演
「日付変更線を超えて――山口、そして中原中也」

2024年6月、西ミシガン州立大学教授で、日本文学の研究者・翻訳家であり、日本語で書く詩人でもあるジェフリー・アングルス氏を山口市にお招きし、かねてから手がけられていた中原中也の英訳に取り組んでいただきました。その一端を多くの皆さんに紹介するために6月8日に山口情報芸術センターのスタジオAで開催したのが、この講演会です。

アングルス氏はアメリカ中西部のオハイオ州のお生まれですが、10代後半に山口県下関市で過ごした経験をもち、「英語を話す自分はアメリカで生まれたが、日本語を話す自分は山口で生まれた」とおっしゃっています。

講演では、下関市での体験に基づいた日米の文化的な比較に始まり、日本文学への関心から本格的な研究・翻訳へと進まれたアングルス氏の半生がユーモアを交えて語られました。

進行中の中也詩の英訳からは、「曇天」「朝の歌」「サーカス」の3篇が紹介されました。翻訳上の工夫や、その作業を通じて見えてくる原詩の魅力などのお話が展開され、フレンドリーな調子の質疑応答もあわせて、集まった聴衆も興味深く聴き入っていました。

公開講演
町田康氏「抑揚と跳躍」

2024年9月7日、坂口安吾研究会・中原中也の会との共催により、作家の町田康氏による講演「抑揚と跳躍」が開催されました。町田氏は著書『残響　中原中也に寄せる言葉』をはじめ、さまざまな形で中也について言及されています。

講演のなかでは、「中原中也ヤンキー論」といったインパクトのある言葉で中也に迫ったり、詩における大衆性・愛唱性について独自の視点で語ったりされました。そのユーモアのある魅力的な語り口と、中也の世界に鋭く切り込んでいく内容に会場は大いに盛り上がりました。参加者からは「最高の講演でした」「身近な例や言葉を使いながら話されていて面白かった」「詩や言葉について深く考えるきっかけになった」といった声が寄せられました。

朗読と音楽
～串田孫一、中原中也～

詩人、哲学者、随想家として知られる串田孫一と中原中也は、直接の交流こそありませんでしたが、8歳違いの同時代人であり、串田がラジオパーソナリティとして声で自分の作品を語り続けたのに対して、中也も自作朗読を好んで行っていたという共通点があります。

そんなふたりの作品を、孫一の長男で多彩な演劇活動を繰り広げる串田和美氏と、映画やドラマで活躍する俳優の小林聡美氏が、チューバとバリトンサックスのデュオ「MUSIC for ISOLATION」の演奏に乗せて朗読するイベントが、2024年12月7日、山口情報芸術センターのスタジオBで開催されました（主催・同センター）。

朗読に先駆けた串田和美氏と中原豊館長とのトークでは、和美氏から父・孫一の実像や父の影響で始めた登山の話、生家に草野心平、尾崎喜八らが集まって自作朗読をしていたことなど、興味深いエピソードが語られました。

ライブパフォーマンスでは、孫一の『山のパンセ』『音楽の絵本』から5篇、中也の「頑是ない歌」「湖上」「お道化うた」など7篇が朗読され、おふたりのかけあいやゆったりとした音楽とのコラボレーションに、満席の聴衆も新鮮な感覚を覚えながら聴き入りました。

撮影：谷康弘 / 提供：山口情報芸術センター

映画『ゆきてかへらぬ』公開

長谷川泰子、中原中也、小林秀雄の出会いと別れを描いた映画『ゆきてかへらぬ』が2025年2月21日に公開されました。脚本家・田中陽造が40年以上前に書き上げていた脚本を、16年ぶりにメガホンをとる根岸吉太郎監督が映画として完成させました。泰子を広瀬すず、中也を木戸大聖、小林を岡田将生が演じている他、富永太郎や辰野隆も登場するなど、文学ファンにも見所の多い作品になっています。

史実をたどるのではなく、「朝の歌」「ゆきてかへらぬ」他の中也の詩、小林の「中原中也の思い出」、長谷川泰子述『ゆきてかへらぬ　中原中也との愛』、中原フク述『私の上に降る雪は　わが子中原中也を語る』などに紹介されたエピソードなどをモチーフとしながら、俳優として成長していく泰子を軸としたドラマが展開しています。

中原中也記念館ではこの映画の制作段階から協力するとともに、4月に予定されている山口情報芸術センターでの上映にも協力する予定です。

©2025「ゆきてかへらぬ」製作委員会

第9回 ぼうしの詩人賞
～あつまれ！未来の中也たち！～

最優秀賞

原田 樹「ぼくのきいろいぼうし」
（山口大学教育学部附属山口小学校1年）

入選作品をご覧いただけます

主なできごと　2024（令和6）年度 記念館行事記録　2024年4月-2025年3月

2024年
4月1日　特別展示　震災復興応援企画（前年度から継続）
当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介

6日　温泉街の朗読会（～7日）
湯田温泉白狐まつりのイベントとして共催実施

17日　企画展Ⅰ「ダダイスト中也のノート」（～7月28日）

特別展示 第29回中原中也賞（～5月26日）

26日　第235回 中原中也を読む会
第29回中原中也賞受賞詩集 佐藤文香『渡す手』を読む

27日　狐の足あととのコラボ企画（～29日）
記念館オリジナル緑茶・和紅茶、スイーツを提供

29日　生誕祭「空の下の朗読会」（ユウベルホテル松政）
自由参加の朗読会（特別ゲスト：和合亮一）、
深川和美・谷川賢作ライブコンサート

第29回中原中也賞贈呈式（ユウベルホテル松政）
受賞詩集：佐藤文香『渡す手』
記念講演「わたしの中の犀星と中也」　講師：井坂洋子
主催：山口市、（公財）山口市文化振興財団

中也web朗読会（オンライン）
中也または自作詩の朗読を動画でX投稿

5月24日　第236回 中原中也を読む会
企画展Ⅰ「ダダイスト中也のノート」見学

25日　プロムナード・トーク①　企画展Ⅰ解説

31日　「わたしの好きな中也の短歌 ランキング発表」YouTube配信

6月8日　公開講演「日付変更線を超えて――山口、そして中原中也」
（山口情報芸術センター［YCAM］）
講師：ジェフリー・アングルス

23日　プロムナード・トーク②　企画展Ⅰ解説

28日　第237回 中原中也を読む会
屋外展示「30歳の詩」（前期）を読む

7月15日　プロムナード・トーク③　企画展Ⅰ解説

26日　第238回 中原中也を読む会（山口情報芸術センター［YCAM］）
蓄音器で聴く中也ゆかりの音楽

8月1日　特別企画展「中也とランボー、ヴェルレーヌ」（～9月23日）
オープニングセレモニー開催

ギャラリートーク　ゾエ・シェレンバウムによる作品解説

中也、ランボー、ヴェルレーヌをめぐる朗読の夕べ
出演：ゾエ・シェレンバウム

4日　プロムナード・トーク①　特別企画展解説

18日　フランス詩の教室―ランボー、ヴェルレーヌの詩をフランス語で読もう！―（山口情報芸術センター［YCAM］）
講師：倉方健作

23日　第239回 中原中也を読む会
特別企画展「中也とランボー、ヴェルレーヌ」見学

31日　機関誌「中原中也研究」第29号発行

プロムナード・トーク②　特別企画展解説

9月7日　公開講演「抑揚と跳躍」（かめ福オンプレイス）
講師：町田 康　共催：中原中也の会

ワイカムシネマ連携 ジャン・ユスターシュ映画祭
（～8日、山口情報芸術センター［YCAM］）

14日　展示見学+フランス料理のお食事会―食文化を通じてランボー、ヴェルレーヌの世界に触れる―①（ル ゴロワ）

20日　展示見学+フランス料理のお食事会―食文化を通じてランボー、ヴェルレーヌの世界に触れる―②（ル ゴロワ）

9月22日　プロムナード・トーク③　特別企画展解説

26日　企画展Ⅱ（前期）「浅田弘幸展――『眠兎』と中也、そして新作絵本」
（～2025年1月26日）

27日　第240回 中原中也を読む会
中原中也の詩「憔悴」を読む

10月19日　中也忌
経塚墓地（吉敷）で一般参加を募った墓前祭、
中也へのメッセージお供え

メイシ交換会（～20日）
共催：山口県立大学「中原中也メイシ交換会運営委員会」

狐の足あととのコラボ企画（～22日）
ノベルティグッズプレゼント、記念カフェメニュー提供

浅田弘幸トーク＆サイン会（KDDI維新ホール）

狐の足あととのカフェコラボ（～22日、11月27日～12月1日）

20日　浅田弘幸サイン会①

25日　第241回 中原中也を読む会
企画展Ⅱ（前期）「浅田弘幸展――『眠兎』と中也、そして新作絵本」見学

11月2日　プロムナード・トーク①　企画展Ⅱ（前期）解説

22日　第242回 中原中也を読む会
屋外展示「30歳の詩」（後期）を読む

27日　浅田弘幸サイン会②

12月3日　第9回「ぼうしの詩人賞～あつまれ！ 未来の中也たち！～」
入選作品展示（～2025年2月24日）

7日　朗読と音楽～串田孫一、中原中也～（山口情報芸術センター［YCAM］）

トークイベント「孫一と中也」（山口情報芸術センター［YCAM］）

8日　第9回「ぼうしの詩人賞～あつまれ！ 未来の中也たち！～」
（クリエイティブ・スペース赤れんが）
表彰式・入選作品朗読会

15日　プロムナード・トーク②　企画展Ⅱ（前期）解説

20日　第243回 中原中也を読む会（湯田地域交流センター）
福田百合子名誉館長と中也の詩を読む

2025年
1月24日　第244回 中原中也を読む会
北原白秋の詩を読む

26日　プロムナード・トーク③　企画展Ⅱ（前期）解説
解説：浅田弘幸

29日　企画展Ⅱ（後期）「原田和明のオートマタと中原中也」（～4月13日）

狐の足あととの連携企画（～4月13日）
相互スタンプラリー、中也ブレンド珈琲販売

2月9日　プロムナード・トーク①　企画展Ⅱ（後期）解説

14日　第22回テーマ展示「郵便で御免下さい――中原中也の手紙」
（～2026年2月15日）

18日　開館31周年

22日　ワークショップ「中也のジグドールを作ろう」
講師：原田和明

28日　第245回 中原中也を読む会
企画展Ⅱ（後期）「原田和明のオートマタと中原中也」見学

3月9日　プロムナード・トーク②　企画展Ⅱ（後期）解説

28日　第246回 中原中也を読む会
テーマ展示「郵便で御免下さい――中原中也の手紙」見学

31日　館報第30号発行

中原中也の会

2024年
6月30日　中原中也の会第27回研究集会「詩の翻訳・文学の翻訳
――中原中也英訳から出発して」
（國學院大學院友会館）
総合司会：四元康祐
講演「中原中也を英訳する」
講師：ジェフリー・アングルス
パネルディスカッション「詩の翻訳・文学の翻訳」
パネリスト：栩木伸明、鴻巣友季子
司会：四元康祐

7月31日　会報第56号発行

9月7日　中原中也の会第29回大会「昭和文学と同人誌――坂口安吾と中原中也」
共催：坂口安吾研究会（かめ福オンプレイス）
総合司会：加藤邦彦
講演「抑揚と跳躍」
講師：町田 康
パネルディスカッション「同人誌『紀元』の空間」
パネリスト：大原祐治、佐藤元紀
司会：吉田恵理

2025年
1月31日　会報第57号発行

第30回中原中也賞

『生きているものはいつも赤い』

高村（たかむら） 而葉（じよう） 氏

第30回の中原中也賞は、公募および推薦による247詩集の中から、高村而葉氏の『生きているものはいつも赤い』（思潮社）が選ばれました。

高村而葉氏は１９７７年大阪府大阪市生まれの47歳（受賞時）。２００５年5月から『現代詩手帖』の新人作品欄に投稿を始め、２００９年、第47回現代詩手帖賞を受賞。その後15年を経た２０２４年、表題作を含む22篇の詩を収めた第一詩集『生きているものはいつも赤い』を思潮社より刊行し、今回の受賞に至りました。

高村詩集は、掴んだ地点や身動きできないその場所に錨をおろすようにして言葉を刻む。言葉をめぐるためらいや、どこでどう生きるのかといった疑念や自問が滲む。生きるうえでぶつかる壁や困難から目をそむけず、時間をかけて編まれたと思われるこの一冊には稀なる完成度の高さがある。

最後まで白熱した討議の結果、高村而葉『生きているものはいつも赤い』を第30回中原中也賞にふさわしい詩集として委員全員一致で選出した。

（「選評」より）

濡れた足にどうぞ、と声をかけられて
穴のあいた靴下を差し出される
親切が飛び跳ねて若い鹿になるなら、そこは豊かな森
そのほとり、多くの濡れた足が通り過ぎて、深い河

路上にはわだかまりのような血の塊がうずくまっていて
押しても引いても動かないから、見ることしかできなかった
遠くのほうには、この世の残光と、それに似たいくつかの
消えない炎
その光景を、助太刀の言葉で語らないように
髭を剃り、馴染みのない店に入る
心にはいつも無知があって
ひとりよりもふたり、そう思うこともあった

（「跳ねる豆」より）

2025（令和7）年度　記念館事業・関連行事予定　2025年4月-2026年3月

展示

企画展Ⅱ［後期］
原田和明のオートマタと中原中也
（1月29日～4月13日）

第22回テーマ展示
郵便で御免下さい
―中原中也の手紙
（2月14日～2026年2月15日）

企画展Ⅰ
中也と横浜
（4月16日～7月27日）

特別企画展
中原中也の〈声〉
―朗読とラジオ放送
（7月31日～10月5日）

企画展Ⅱ
中也、この一篇
―「汚れつちまつた悲しみに……」
（10月8日～2026年4月19日）

第23回テーマ展示
『在りし日の歌』（仮）
（2026年2月18日～2027年2月中旬）

屋外展示
朝の詩
（5月～2026年4月）

イベント・記念日

湯田温泉 白狐まつり
（4月5日、6日）〈無料開館日〉

生誕祭「空の下の朗読会」
（4月29日 中原中也記念館前庭）
〈無料開館日〉

中也忌
（10月22日）〈無料開館日〉

山羊の日（第1詩集『山羊の歌』刊行日）
（12月10日）

開館32周年
（2026年2月18日）〈無料開館日〉

中原中也を読む会

毎月 第4金曜
中原中也記念館ほか

中原中也の会

中原中也の会第28回研究集会
（6月15日 國學院大學院友会館）

中原中也の会第30回大会
（9月6日　セントコア山口）

※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第30号】令和7年3月31日
発行◎中原中也記念館　〒753-0056　山口県山口市湯田温泉一丁目11-21　TEL 083-932-6430　FAX 083-932-6431　E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp　https://www.chuyakan.jp/